

## 里山研修会報告

日 時：2019年12月19日（木）

場 所：茨城県自然博物館

参加者：6名

報告者：浅井修三

令和元年12月19日、茨城県自然博物館で里山研修会が行われました。参加者は芳野、星野、横山、西田、辰尾、浅井の各氏6名です。博物館の敷地内での里山保全活動の視察と博物館内の見学を行いました。



最初に宮沢賢治展を見学してから、里山へ向かいましたが、ちょうど5名ぐらいのボランティア員が植生の調査を行っていました。シートを持って100種ほどの野草の花や実の状況を調べ、そこに書き込んでいました。花はなく、葉もほとんど枯れているなかで、どれがどの植物なのかわかるというのは驚きで、本当に植物が好きな植物学者のようでした。これを基に、年ごとの生育状況、繁殖しているのか、衰退しているのかが解かるそうです。その中で、リーダーの伊藤さんが里山保全の活動内容を語ってくれました。一番の目的は貴重な野生の動植物を維持し、繁殖させていくということです。そこで困るのは業者が入って敷地内の草刈りをするとき、全部草を刈ってしまうので、聖域を作つて刈られないよう守っているそうです。保全するエリヤで特徴的なのは水源から水を引いて、小川を造つて常に水を流しています。小川の途中で小さな池があり、二つの5坪ほどの田んぼもあります。有機栽培で稻を育て、稻刈りもしています。年中水があるおかげで、二ホンアカガエルやトンボ、昆虫が生息しています。今は冷たくて現れませんが、暖かくなればメダカも現れるそうです。ここ一帯が湿地帯なので、子供たちも見学に来ることができるビオトープになっています。そして、昔、小川の奥の周りに、この地元に生息していたヘイケボタルを放したところ、住み着くことができ、毎年夏になるとホタルが出てきます。取り立ててえさを



与えていませんが、繁殖しています。近くに竹林もあり、竹を切って子供たちに竹細工を作ることもやっています。やはり、ここで特徴的なのは湿地帯であるということです。そのため、多くの植物、昆虫、動物が生息できる貴重な里山になっています。しかし、今は冬で草は枯れていますが、暖かくなると雑草はすぐにはびこり、これらから貴重な植物をいかに守っていくか、毎年闘いだそうです。広い敷地内を管理するには相当多くの人数が必要です。

ボランティア登録会員は 100 名ぐらい、月 1 回は植生の実態調査や子供たちのイベントなど、いろいろな催し物を行い、週一回は 5~6 名のメンバーで里山の保全活動をしています。敷地内はいろいろな樹木が生えていて、それぞれ名前が付けられています。菅生沼にはすぐ行くことができ、木道が造られ、ヤナギの木が多く見られます。本来、下は水面でしたが、川から運ばれてくる土砂が沼を狭めてしまい、水面がほとんど見られなくなっています。それでも遠くの方で数羽のハクチョウが見られました。車で近くに行つてみると、数十羽のハクチョウが群れ、コガモ、ダイサギ、アオサギなどが点々としていました。ほとんどのハクチョウの首が黒いので、まだ幼鳥だと思いましたが、アマモの根を食べているので黒いという説もありました。

午後からは博物館を見学しました。膨大な数の自然展示物で、地球の生き立ちや人類の発生など、全部見るには一日かけても見られないほどです。特に印象に残ったのは、恐竜の骨の復元実態で、高さ 5.3 メートルのマンモス、12 メートルのヌオエロサウルスの大きさに度肝を抜かされました。それと、宮沢賢治の地質に対する博学と自然に対する愛情を童話に表している姿は心打たれるものがありました。皆さん、寒い中を遠路はるばるといった感じでしたが、各々収穫があったようでした。

